2020/10/09 14:16:15
拡縮率：118.07%

寄稿

京都国際写真祭「KYOTOGRAPHIE」

異なる世界の見え方を知るということ

有馬 恵子

２０１３年から毎春に開催されてきた「京都国際写真祭KYOTOGRAPHIE」。今年はコロナ禍でいったん延期されたが、会期を秋に移して開催に漕ぎ付けた。今回の全体テーマは〝見る力・見通し〟という意味を持つ「VISION」。京都市内に散らばる展示会場の中でも、最も意欲的なプロジェクトが、フランス在住の写真家マリー・リエス（１９７４年～）の「二つの世界を繋ぐ橋の物語」である。この「二つの世界」とは何を指すのだろうか？

リエスは10年にわたって国立パリ盲学校に通う子どもたちを撮影し、版画家の技術協力で子どもたちが触れることができる凹凸のある写真を試作していた。今回リエスにとって初の展覧会に際し、キュレーターの天田万里奈（80年～）は、全盲の２人、美術家の光島貴之（54年～）と文化人類学者の広瀬浩二郎（国立民族学博物館准教授、67年～）の協力を得る。何よりも「触る写真」は、手で写真の要素を認識できるかが肝心。ＵＶ加工印刷の技術を用いてさらに改良されてゆく。指先で写真の構図や状況を感じ取ることができるよう、被写体の輪郭を凹凸に加工し、光は細かく点で示すなど、光島らの助言を反映させた。最終的にフランスで制作された6点に加えて、日本で制作した5点が完成した。

展示会場は光島のアトリエに決まった。元西陣織工場のアトリエには、いたるところに段差や階段があり、「バリア」だらけ。光島は「バリアフリーの空間は詰まらない。むしろバリアがあるバリア・コンシャス（障害物を意識する）な空間の方が楽しい」のだという。会場では視覚障害のある人と晴眼者とが対話しながら写真を鑑賞するプログラムが開かれる。筆者が光島と鑑賞した時のこと、写真の中の子どもたちとフェンスを説明すると、彼は写真と点字を交互に触れながら、「フェンスは、子どもたちが外の世界に旅立つ不安、盲学校の内と外を表しているのでは」と、盲学校に通っていた自らの経験を踏まえて子どもらの思いを汲み取った。二つの世界とは、視覚に頼らずに感じることで見ている世界と、視覚に頼って見ている世界。リエスのプロジェクトでは、その二つの世界が一瞬、１本の橋の上でつながり、互いが見えている世界を交感するのである。

会場で写真を鑑賞する光島貴之（中央）と筆者
©藤村勇介

パリ盲学校の中庭にて。左からジュリー、ルイ、ジョセフ。2012年 ©Marie Liesse

芸術祭は多くのボランティアによって支えられている。KYOTOGRAPHIEのボランティアは中学生から87歳まで約400人。第1回から毎回参加している川那辺育美（主婦、48年～）は、にこやかにキビキビとあちこちの会場を歩き回り、「コロナ追跡登録のスマホ画面が分かりにくい」など、若者中心の運営スタッフには「見えていなかった」運営の盲点を補ってくれる。川那辺の現場を見る力・見通す力は、KYOTOGRAPHIEのテーマであるVISIONを体現しているかのようだ。

世界の見え方は人それぞれ。見えている世界がバラバラだからこそ、互いの異なる見え方を知ることで、時には世界の捉え方が変わるような体験をすることがある。それが芸術祭という場で起こることであろう。

KYOTOGRAPHIEの「GRAPH―グラフ」には〝点と点を結んで線を描く〟という意味がある。展示は寺社や町屋や歴史的建造物など京都市内の58会場に点在している。歩くこと、見ること、話すこと、触れること、そして人とつながることにより、自分だけの「キョウト・グラフィー」を描いてみてはどうだろうか。

京都市内各所で今月18日まで。「二つの世界を繋ぐ橋の物語」は、アトリエみつしまSawa―Tadori（京都市バス「大徳寺前」バス停近く）。一般800円、学生600円。光島貴之の個展も同時開催中。午前11時～午後6時。12日は休み。視覚障害のある人の予約は電話070（4291）3977まで。

（立命館大学大学院一貫制博士課程・社会学／KYOTOGRAPHIEプロジェクト・マネージャー）